愛知淑徳大学論集－文学部篇－　第 49 号　2024.3　191-202

日本における西洋音楽の聴き方に関する一考察：1910 年－30 年代の音楽講話を視点として

A Study on How to Listen to Western Music in Japan
from the Perspective of Music Lectures in the 1910s-1930s

白　石　朝　子
SHIRAISHI Asako

キーワード：西洋音楽受容　レクチャー・コンサート　音楽愛好家

はじめに

日本の音楽は 19 世紀後半に西洋近代の文化と接触し、その後西洋音楽を受容する土壌が整えられていった。明治・大正期に西洋音楽を享受できたのはごく一部の限られた人々であったが、芸術歌曲創作の試みや新日本音楽運動、浅草オペラの隆盛や流行歌など多彩に展開された。その後、西洋音楽は学校教育とも密接に関連して、日本社会においては重要な役割を果たすようになり、音楽愛好家が増えていったといえる。

第一次世界大戦とそれに続くロシア革命の影響により帰国を余儀なくされた当時の留学生たちは、日本で西洋音楽の紹介に努めた。例えば、1915 年に『バッハよりシェーンベルヒ』を上梓した大田黒元雄（1893-1973）は、その後に野村光一（1895-1988）や堀内敬三（1897-1983）らと同人誌『音楽と文学』を創刊して同時代の作曲家の紹介や評論を発表した。これらは、音楽評論の先駆けとしても捉えられている。

その一方で、同時代から外国人演奏家が来日するようになったことは、日本の音楽に大きな影響を与えた。堀内が「これまで邦楽の演奏にだけあって洋楽の演奏からはほとんど感じ得なかった『芸の力』を初めて外来音楽家から味わわされた。」[1] と述べているように、彼らの来日公演は日本の聴衆を育てる結果となったといえる。

では、このような西洋音楽の導入期において、西洋音楽を愉しむために「音楽の聴き方」はどのように伝えられたのであろうか。筆者はこれまで、その一つの視点として、音楽を語る「レクチャー・コンサート」という様式が如何に日本に伝わったのかを検討してきた。なかでも 1925 年から 37 年にかけて来日したフランス人音楽家ジル＝マルシェックス（Henri Gil-Marchex 1894-1970）が、1931 年にはテーマを設定した音楽講演を行うことにより聴衆に音楽理解を促していったことを明らかにした。[2]

本研究では、1）1925 年以前、官主導により東京音楽学校を中心に西洋音楽の教授がなされていく一方で、いわゆる専門家ではない日本の聴衆、音楽愛好家を育てるために、どのような

働きかけがなされたのか、2）1931 年以後、連続した音楽講演がどのように行われたのかを視点に、先行研究を踏まえながら、1）では、レコードを用いた田辺尚雄（1883-1984）『西洋音楽講話』（1915）、クレービール著・小松耕輔訳『音楽の聴きかた』（1920）、マーカム・リー著・杉浦躬行訳『音楽の一般的知識』（1924）について、2）では、東京音楽協会が主催して 1934 年 9 月から一年間月一回開かれた音楽講演会『洋楽講話』を対象として検討する。これらを通して、西洋音楽導入期の日本で「西洋音楽の聴き方」がどのように変化していったのか、その一端を明らかにしたい。

1. レコードを使用して示された「音楽の聴き方」

1915 年、田辺尚雄によって岩波書店から出版された『西洋音楽講話』は、田辺が私立東洋音楽学校で 1915 年 8 月 1 日から 10 日まで行った夏期講習会での講演内容を補正、まとめたものである。田辺は、校長の鈴木米次郎（1868-1940）から要請を受け、この学校で音響学や西洋音楽史の講義をしていた。[3]

講習ではアンヌ・フォークナー（Anne Faulkner 1877-1948）が 1913 年に出版した『音楽の聴き方：音楽史と音楽鑑賞学習の実習講座 What We Hear In Music : a laboratory course of study in music history and appreciation』がテキストとされ「数百枚のレコードを用いて」行ったことが明記されている。田辺は本書の出版にあたり以下のように述べていた。

> 同講習會は音樂に對して初心の者に向つて西洋音樂の大要を講じたものであるから、従つ此の書も亦初めて西洋音楽の何たるかを知りたいと思ふ人々の爲めにのみ効力があるのであつて、専門家に向かつては用のないものである。

これは、フォークナーの原著において序文を記したクラーク（Frances Elliott Clark 1860-1958）が、音楽科における鑑賞指導を提唱しており「この指導内容は、音楽の形式や語法を理論的に学ぶのではなく、音楽の実用的な知識を身につけることを念頭に置き、広く文化的なスタイルで音楽を学ぶための体系的な計画を提供することが著者と出版社の切なる願いであった」[4] と述べていることからも納得できる。

本書の内容は、原著が「Ⅰ. The principles of music 音楽の原理」、「Ⅱ. The history of music 音楽の歴史」、「Ⅲ. The orchestra : The development of instrumental music オーケストラ：器楽音楽の発展」、「Ⅳ. The opera and oratorio オペラとオラトリオ」の四部になっているように、第一篇「音楽の要素」、第二篇「欧州各国俗楽の比較」、第三篇「西洋音楽の発達」、第四篇「神劇および歌劇」から構成されている。第一篇は表 1 の通りである。

表 1.『西洋音楽講話』第一篇「音楽の要素」

章	題目
第一章	音楽の四要素
第二章	国民的特性ー俗楽のことー
第三章	形式的構造
第四章	詩的思想
第五章	描写と標題楽

第一章「音楽の四要素」では、音楽の基礎的要素を（1）国民的特性、（2）形式的構造、（3）詩的思想、（4）描写に分けて、これらが組み合わされて音楽が構成されていることを示した。（1）国民的特性では、「西洋」という枠組みではなく各国の特性を理解することの大切さを述べ、「音樂といふものは決して自然にある音響を眞似したのではなく人間の心の情を直接又は間接に音を以て表はしたものであるから、各國民各人種の気風特質に左右せられるのは当然である」[5] とし、第二章へと繋げている。また、（2）形式的構造では、音色、強弱（拍子・リズム）、高低（音階、和声）、楽曲の形式を示して第三章へ、（3）詩的思想では美的感情の表現として音楽が生まれることを説き、第四章へと繋げた。そして、（4）描写では、その詩的思想をいかに音楽に表すかについて語り、主観的描写法について述べ、第五章へと繋げている。

第二章「国民的特性」では、俗楽として（1）舞踊楽、（2）民謡、（3）愛国的軍歌、（4）近世的国民楽の 4 つに分けて解説がなされた。そして、第三章「形式的構造」では、音楽理論や楽器の種類、演奏形態について写真を交えて詳しく説明がなされている。また、拍子の強弱として「アルマンド」や「クーラント」、また「ポロネーズ」など様々な舞踊音楽について、その特徴と楽曲が紹介されるとともに、音階と和声、対位法と和声法についても述べられた。例えば、対位法ではバッハ（Johann Sebastian Bach 1685-1750）〈平均律クラヴィーア曲集第 1 巻第 5 番ニ長調〉のフーガ楽譜付きで解説がなされたが、三部形式の説明では、〈年たつ今朝〉（小学唱歌集第二編第三十六）が用いられており、馴染みのある曲を例に挙げることで読者に向けて理解しやすい提示がなされている。

さらに、第四章「詩的思想」では、その主要なものとして（1）愛情、（2）宗教心、（3）幸福、（4）平和を挙げ、代表的な作品例を挙げた。そして、第五章「描写と標題楽」では、描写的音楽として、オルト（Orth Charles J. 1867-1921）の《時計の店で in the clock store》をその内容と共に紹介して、「趣味の下等な人間は之を好む者も可なりあるが、要するに藝術上の最劣等にあるものである。言ひ換へれば、藝術といふより寧ろ一種の遊戯である」と述べている。この作品は、後に国定教科書の一年生鑑賞教材として掲載された。

続いて第二篇「欧州各国俗楽の比較」では、各国俗楽、つまり国民音楽について解説した後、各国の特徴と作品例が挙げられている。その順序は、「イタリア」、「スペイン」、「フランス」、「ドイツ圏」、「ボヘミア」、「ハンガリー」、「ポーランド」、「ロシア圏」、「スカンジナビヤ半島スイーデンとノルウエー」、「イギリス圏」、「アメリカ合衆国」となっている。この順序には、「本篇において述べる國の順序の撰び方は南の方から始めて順に北の方に及ぼすことにした、之れは立派な音楽が速く進歩をして行つた歴史的の順序と一致させた」という意図があり、世界地図と共に示された。これはフォークナーの原著で「これらの国々をヨーロッパの文明化と一致するようにして扱うため」[6] という内容に即している。この国民音楽に対する解説が第三篇の西洋音楽史について理解を促すことになっただろう。

第三篇「西洋音楽の発達」は、表２のような内容であった。まず、古代と中世、近世に分けられ、古代は「エジプト、アッシリア、ユダヤ、ギリシア、ローマの音楽」について述べられた。中世は宗教楽と俗楽に分けられ、それぞれ一章が割かれている。

表２.『西洋音楽講話』第三篇「西洋音楽の発達」

章	題目	章	題目
第一章	古代の音楽	第八章	ドイツ現代楽派
第二章	中世の宗教音楽	第九章	フランス現代楽派
第三章	中世の俗楽	第十章	イタリア現代楽派
第四章	バッハとヘンデル	第十一章	ロシア現代楽派
第五章	クラシック単音楽	第十二章	ボヘミア楽派
第六章	ドイツ式ロマンチック楽派	第十三章	スカンジナビア楽派
第七章	フランス式ロマンチック楽派	第十四章	イギリス及アメリカ楽派

まず、第二章「中世の宗教音楽」では、「アンブロジウス及グレゴリー聖咏時代、ネザーランド對位法時代、伊太利樂派時代」に分けられて楽器の絵を交えながら詳細が説明された。聖歌を生み出したアンブロジウスやグレゴリウス一世から始まり、イタリアルネサンス後期のパレストリーナ（Giovanni Pierluigi da Palestrina 1525-1594）に至るまで作曲家も紹介されている。第三章「中世の俗楽」では、「トルバドール、ミンネ歌人、マイステル歌人」に分けられて、それぞれの特徴と時代の変遷について解説された。

近世は、「クラシック期（バッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン）、ロマンチック期（ドイツロマンチック派、フランスロマンチック派）、現代音楽国民樂派（ドイツ現代樂派、フランス現代樂派、イタリー現代樂派、ロシア現代樂派、ボヘミア樂派、スカンヂナビア樂派、イギリス樂派、アメリカ樂派）」に分けて示された。第五章「クラシック単音楽」では、スカルラッティ（Domenico Scarlatti 1685-1757）やクレメンティ（Muzio Clementi 1752-1832）の功績についても説明されている。また、ロマン派についてもドイツとフランスそれぞれが一章分で述べられた。第六章「ドイツ式ロマンチック楽派」では、「歌謡式、美的」なシューベルト（Franz Schubert 1797-1828）、「描写的、民楽式」のウェーバー（Ernst von Weber 1786-1826）、「技巧的、愛情的」なメンデルスゾーン（Mendelssohn Bartholdy 1809-1847）、「詩的、感情的」なシューマン（Robert Schumann 1810-1856）について詳しく述べた後、シュポーア（Louis Spohr 1784-1859）やライネッケ（Reinecke 1824-1910）などについても触れている。形式を重視して美を表したクラシック派から感情を最も大切なものとして表現する変化を示した。第七章「フランス式ロマンチック楽派」では、「非常に音楽理論に精通し管弦楽理論において古今無比な」ベルリオーズ（Hector Berlioz 1803-1869）、「卓越したバイオリン家」パガニーニ（Niccolò Paganini 1782-1840）、「詩的の天才」ショパン（Frédéric Chopin 1810-1849）、「ドイツ式ロマンチック派とフランス式ロマンチック派とを調和融合せし

めて居る」リスト（Franz Liszt 1811-1886）について詳しく述べている。さらに第八章から第十四章にかけては、国別に作曲家、音楽の特異性が示された。

紹介された作曲家は、表３のとおりである。田辺は、「現代樂派の主義とするところは標題音樂（ロマンチック派の主義）と國民的特性との結合にあるのである。當時その機運に際してドイツ、フランス、イタリーの他にボヘミア、スカンヂナビア、イギリス、アメリカ等の各國民性を代表する音樂が續々として現はれて来た」と述べているように、各国について平等に解説がなされている。

表３.『西洋音楽講話』第三篇『西洋音楽の発達』第八章 - 第十四章

章	題目	紹介された主な作曲家
第八章	ドイツ現代楽派	Brahms, Rheinberger, Bruckner, Bruch, Reger, Goldmark, Mahler, Weingartner, Wolf, Schillings, R.Strauss, G.Schumann
第九章	フランス現代楽派	Franck, Saint-Saëns, Bizet, Massenet, Debussy, d'Indy, Chausson, Bruneau, Chabrier, Chaminade, Fauré, Ravel,
第十章	イタリア現代楽派	Sgambati, Martucci, Busoni, Bossi, Verdi, Mascagni, Puccini
第十一章	ロシア現代楽派	Glinka, Rubinstein, Cui, Tchaikovsky, Rimsky-Korsakov, Glazunov, Arensky, Rachmaninoff, Scriabin,
第十二章	ボヘミア楽派	Smetana, Dvořák
第十三章	スカンジナビア楽派	Gade, Bull, Kjerult, Grieg, Svebdsen, Sinding, Aulin
第十四章	イギリス及アメリカ楽派	Balfe, Sullivan, Thomas, Mackenzie, Parry, Cowen, Elger, MacDowell, Paine, Foote, Nevin, Converse, Parker

最後に第四篇「神劇及び歌劇」では、オラトリオとオペラの歴史的変遷、またその特徴や構造について解説した後、イタリア、ドイツ、フランスでの発展について述べた。章立ては表４の通りであり、ワーグナー（Richard Wagner 1813-1883）について解説したうえで、その影響を同三国から分析した。第十二章「現代国民歌劇」においては、グリンカ（Mikhail Glinka 1804-1857）、チャイコフスキー（Pyotr Ilyich Tchaikovsky 1840-1893）、スメタナ（Bedřich Smetana 1824-1884）について、その作品と共に解説した。

表４.『西洋音楽講話』第四篇「神劇及び歌劇」

章	題目	章	題目
第一章	神劇	第七章	フランス大歌劇
第二章	歌劇の構造	第八章	ワグネル
第三章	歌劇の起源及び初期の歌劇	第九章	ワグネルの影響　ドイツ現代歌劇
第四章	グルックの改革及びクラシック歌劇	第十章	ワグネルの影響　フランス現代歌劇
第五章	イタリー派の歌劇	第十一章	ワグネルの影響　イタリー現代歌劇
第六章	ドイツ式ロマンチック歌劇	第十二章	現代國民歌劇

以上の内容を踏まえると、本書は音楽について偏りなく、「公平に」聴く方法を伝えている

ことがわかる。演奏家がそのレパートリーから演奏したものではなく、レコードを使用して音楽史を説いたことが大きく寄与しているだろう。

2.「音楽の聴き方」を示した出版物

『西洋音楽講話』出版の5年後、1920年にヘンリー・エドワード・クレービール（Henry E. Krehbiel 1854-1923）『音楽の聴き方 How to listen to music：hints and suggestions to untaught lovers of the art』が小松耕輔（1884-1966）によって翻訳され刊行された。クレービールは、アメリカのジャーナリスト・音楽評論家であり、1880年ニューヨークの新聞社『The New York Tribune（ニューヨーク・トリビューン）』に入社、アメリカ歌謡・音楽劇に関する鋭くかつ的確なコメントが世間に評価された人物である。本書は、1896年刊行後数十年にわたってアメリカで音楽鑑賞の指南書として音楽を消費する大衆に広く用いられた。[7]

表５.『音楽の聴きかた』

題目	頁数
音楽的要素の認識	15-38
音楽の内容と種類	39-75
近代の管弦楽	77-125
管弦楽演奏会	127-157
洋琴独奏会	159-205
歌劇	207-257
唱歌隊及び合唱楽	259-301
音楽家と批評家と公衆と	303-330

小松は1906年に東京音楽学校を卒業後、1919年フランスに渡り西洋音楽の研究を深めた。それまで、日本では1900年に滝廉太郎（1879-1903）、1910年に山田耕筰（1886-1965）、1920年に信時潔（1887-1965）と、いずれもドイツのベルリン音楽学校を選んで学んでいた。小松は、それに対して当時のパリ楽壇において新しい音楽を数多く聴き、その時の体験をもとにして460頁の大著『現代仏蘭西音楽』を1927年に発表している。さらに同年、主幹として『アルス西洋音楽講座』を刊行した。

小松は『音楽の聴きかた』の冒頭で、「本書は音樂の教授や學者を啓發するのを目的とはしない。本書はそれ相當の謙譲なる態度を以て、直接に音楽学生に寄興しようとするのである。」と述べている。このことから専門的な音楽書というより、広く一般に音楽の聴き方を伝える内容であることが分かる。内容は表5に示した通りである。田辺尚雄『西洋音楽講話』と同様に、「音楽の要素」「音楽の内容と種類」について最初に説かれている。ただし、小松が序論で「本書は、我樂界にとつて、必ずしも、謙遜なる態度を以て原著者の云はるゝごとくしかく通俗なるものではない。彼國に於て極めて通俗なる事柄も我國現状にとつてはなほ可なり程度の相違を感ずる。」と述べているように、本書の内容は音楽的知識を必要としていることは否めない。この点では、『西洋音楽講話』で前述したように、田辺が「本書中に掲げた實例は出来る限り我國人に広く知られた所の西洋楽曲を選んだ」ことからも、大きな違いがあるといえるだろう。

また、1924年には田辺が校閲、杉浦躬行が翻訳したマーカム・リー（Ernest Markham Lee 1874-1956）の『音楽の一般的知識』が出版された。マーカム・リーは、イギリスの作曲者・音楽評論家であり、原著は1918年に出版された『On Listening to Music』である。田辺は本書

の序文で以下のように述べている。

近頃我國の各階級を通じて西洋音楽が非常に普及して来たことは驚くべきものである。その原因を或る人は近頃欧米の第一流の音樂大家が来朝するからだといふて居るが、決してそれが根本の理由をなすものではない。…私の考ふるで所は之れには何うしても西洋音樂に對する常識的教育の普及といふことが根本の理由をなして居るものと考へられる。…専門的教育は極めて極小なる部分に止まるのであつて，決してその普及を為すものではない。…通俗的な音樂講演と通俗的の音樂指導書とが今日の西洋音楽の普及を成功せしめた最大の原因であると考へる。

これは、マーカム・リーの序文「普通の音樂愛好者の聴くことあるべき総ての音楽の種類を網羅し、其各種類に応じて各一章を設くるのの學に出でなかった。…而して吾々の目的とするところは識者が音楽会に行かれる前に如何に幼稚な如何に断片的なものでもよい、兎に角期待すべきものに就て何等かの智識を得られんことにある。」と述べていることに一致する。内容は表 6 の通りであり、『西洋音楽講話』のように演奏会を想定して、それぞれの演奏形態に合わせて、音楽をどのように聴くかが説かれている。

表６.『音楽の一般的知識』

章	題目	章	題目
第一章	「聞く」と「聴く」の相違に就いて	第九章	マドリガル、其他の聲樂形式
第二章	如何にして音樂を解すべきか	第十章	教會音樂
第三章	管弦樂、交響樂、序樂、樂詩、其他	第十一章	オルガン・リサイタル
第四章	競争曲（司伴奏）と伴奏附の獨奏曲の形式	第十二章	歌劇
第五章	室内楽（チャムバーミュージツク）	第十三章	劇場音樂
第六章	ピアノ・リサイタル	第十四章	演奏會の混成的形式
第七章	聲樂曲の獨唱會	第十五章	家庭音樂
第八章	聖樂、カレタ、其他の聲樂形式		

その一方で第十五章「家庭音楽」では、演奏会ではなく蓄音機レコードや自動ピアノでの演奏を楽しむことも推奨し、その際どのように音楽を選んで聴くと良いのかが提示されている。

以上のように、西洋音楽導入期においては「音楽の聴き方」を提示する書物が出版され、演奏会とは違うアプローチで聴衆を育てていったことがわかる。また、同年に出版されたドイツ文学者、小池秋草（1878-1969）の『外遊印象』では、ドイツ・ベルリンから最新の音楽情勢が伝えられている。

音楽教育の普及は店頭に併ぶ數多の音樂書や舞踊、音樂教習所の多いことでも察せら

れます。民間大学では必ず音樂講座があり、一週一回二三か月に亘り『歌謡』『オペラ』『寺院楽』『弦奏樂』『打樂』といつた風に一種づゝの講義附の演奏会を附属させたのもあります。[8]

『講義付演奏会』という形態がすでに紹介されていることは、注目すべきことである。以上のことから、「西洋音楽の聴き方」が変化していった様相をみることができるだろう。

3. レコードを用いた音楽講演会『洋楽講話』（1934-1935）

これまで出版物によって伝えられた「音楽の聴き方」が、一連の講演会となって示された例がある。伊庭孝（1887-1937）が 1934 年から 1935 年にかけて主宰した『洋楽講話』である。日本でも実際に広く音楽愛好家を対象として、レコードを用いながら「西洋音楽の理解」を広めた。伊庭は、西洋音楽および日本音楽に関する書籍を数多く著しており、1921 年から 25 年にかけて白眉社から音楽講話叢書を監修している。その約 10 年後に行われた『洋楽講話』（第 1 回「音楽の話の会」から改題）は東京音楽協会主催、日本ビクター及び三越楽器部後援のもとで 1934 年 9 月から 1 年間行われた。内容は表 7 の通りであり、一般の音楽愛好家に向けて系統立てて組み立てられた約二時間の講演会であった。その目的は以下のように記載されている。

「音楽の話の会」は一般の音樂愛好者諸氏に西洋音樂の大綱を最も平易に解説する講話會でありまして、十二回連續して完了いたします。講師は洋樂評論壇上の第一流の諸名士を網羅して居りますし、又講演に使用される音樂は日本ビクター蓄音器會社が提供される無盡蔵なレコードに依つて充たされます。凡そ斯程大規模な又内容充實せる音樂講演會は嘗て我が楽壇で催されたことはありますまい。世の各方面の愛樂家諸氏のご来聴を歓迎致します。

表７．『洋楽講話』（1934 年 9 月～ 1935 年 8 月）の内容

	日程	テーマ	講師
第1回	9月15日	（イ）音楽とは何ぞや（ロ）楽器の音色とその組み合せ	伊庭孝
第2回	10月16日	（イ）リズム、メロディ、ハーモニー（ロ）形式	菅原明朗
第3回	11月15日	肉聲の音色、重唱及合唱	津川圭一
第4回	12月13日	詩と音楽	小松耕輔
第5回	1月15日	歌劇	堀内敬三
第6回	2月15日	独奏音楽	鹽入亀輔
第7回	3月15日	合奏音楽	山根銀二
第8回	4月15日	ソナタ形式の解剖	須永克己
第9回	5月15日	ベートーヴェン　9つの交響曲	増澤健美
第10回	6月13日	舞踊音楽と交響詩	大田黒元雄
第11回	7月15日	音楽史（ベートーヴェンまで）	太田太郎
第12回	8月15日	音楽史（ベートーヴェンより現代）	牛山充

当時の『月刊楽譜』には毎月宣伝記事が掲載された。講演会後にはいくつか報告の記事もみられ、第 3 回では約三百名の来場者が訪れるなど盛況であったことが分かる。伊庭孝の第 1 回の内容については、『月刊楽譜』第 23 巻 10 号と 11 号にその詳細が掲載された。この講演会においては音楽理論、音楽様式、最後に音楽史が説かれている。これらは各回で講演者が異なったため、それぞれのテーマ設定があり一概に比較はできないが、講演内容には偏りがみられる。その一方でレコードが普及したことで、「音楽を聴く」ことが「音楽を理解する」ことへとつながり、音楽講演として様々な形態へと変化していった過程としても捉えられるのではないだろうか。

4. パリで盛んに行われた音楽講演

『洋楽講話』が行われた 1934 年、『月刊楽譜』10 月号ではパリで音楽講演が盛んに行われていることがいち早く知らされている。そのなかで、執筆者の山田忠夫は以下のように述べている。

> 音樂は直観を以て聽かる可きものであつて、語られ、説明せられる音楽を通して理智的に理解す可きものでないと考へる人があるかも知れないが我國愛好家の洋楽に對する教養はもつと理智的乃至は智識的手段の助けに依つて深められる必要があると思ふ。此點から見て羨ましい程盛んに音楽講演が行はわれてゐるのは巴里である。

山田はパリで行われていた音楽講演を「(A) 演奏付講演会、(B) 講演又は解説付演奏会、(C) 演奏講習会、(D) 講演演奏会」の 4 つに分けて報告した。なかでもフランスのジャーナリスト・評論家アドルフ・ブリッソン（Adolphe Brisson1860-1925）の妻イヴォンヌ・サルシー（Madeleine-Yvonne Sarcey 1869-1950）が創設した「アナール大学 l'université des Annales」と名付けられた講演会シリーズを紹介している。この一連の講演会は、フランスの雑誌『レ・ザナル *Les Annales*』が主催して政治、経済、科学、藝術等各分野の著名人を招聘して連続して開いたものであった。その中で音楽部門は 1930 年以降、思想家、詩人、小説家の講演と音楽の演奏によって開催されたようである。[9] このように、フランスでは一つの団体が講演者と演奏者を変えて連続的に音楽講演会が開かれる土壌にあった。

山田は、1933 年 -34 年に行われた内容について表 8 のように報告している。この講演会では、講演者と演奏者が異なる形で狭義的なテーマに焦点が当てられており、第一流の演奏家が実際の演奏を担当していることが理解できる。そのほかにも多くの講演演奏会について報告がなされており、例えば哲学と音楽史をテーマにした講演演奏会、現代音楽家を主とした講演演奏会、曲目を解説しながら演奏する連続演奏会など様々な形態がある。これについては、また稿を改めて論じたい。

表 8.『l'université des Annales 講演会（1933-1934・音楽部門）』の内容

	テーマ（原文ママ）	講演者	演奏者
第1回	ウィーンの音楽	Henry Bidou（1873-1943）	Charlotte Lehmann（1888-1976）
第2回	舞踊と其天才	ギュイ・ド・ブルタレス（ママ）	La Argentina（1890-1936）
第3回-第9回	ショパンに就いて	Alfred Denis Cortot（1877-1962）	
第10回	何故私は室樂曲を好むか	Georges Duhamel(1884-1966)	コーリッシュ弦楽四重奏団
第11回	偉大なる王の宮廷にて	Hélène Vacaresco（1864-1947）	Maria Modrakowska（1896-1965）
第12回	西班牙の喜歌劇とウィーンのオペレット	ヂャン・ダルス（ママ）	Conchita Supervía（1895-1936）
第13回	東洋の呼び聲と舞踊	Émile Boël（1871-1956）	ニューヨーク・オーケストラ
第14回	モーツァルトの作品	Reynald Hahn（1874-1947）	Magda Tagliaferro（1893-1986）
第15回	眞のドン・ヂュアン	Adolphe Boschot（1871-1955）	Charles Panzéra（1896-1976）
第16回	ブラームス、リヒャルト・シュトラウス、フーゴー・ヴォルフ	ヂャン・オーブリー（ママ）	Elisabeth Schumann（1888-1952）
第17回	ファウストの劫罰を繞つて	Adolphe Boschot	Georges Thill（1897-1984）

5. まとめと今後の展望

本稿では、西洋音楽導入期の日本において「西洋音楽の聴き方」がどのように示されていったのかについて、1910 年 -30 年代の音楽講話を視点として検討してきた。『西洋音楽講話』(1915)『音楽の聴きかた』（1920）、『音楽の一般的知識』（1924）は、いずれも専門家を対象としたのではなく、聴衆を育てるために音楽鑑賞に必要な知識や理論について説かれていたことが示された。なかでも、『西洋音楽講話』は音楽について偏りなく「公平に」聴く方法を伝えていた。また、山田によって報告されたように、フランスでは講演と演奏による「レクチャー･コンサート」が音楽を愉しむために盛んに行われてた 1930 年代、日本においても音楽講演会『洋楽講話』が実施されていたことが明らかになった。日本で講演と演奏を伴った本格的な「レクチャー・コンサート」が行われるのは戦後まで待たなければならないが、レコードを用いた方法であっても「西洋音楽の聴き方」について講演という形態で示されたことは注目すべきことだろう。

今後、日本での西洋音楽受容を視点として、フランスで盛んに行われていた「レクチャー・コンサート」がどのように派生していったのかについて研究したいと考えている。

［付記］

本研究は、JSPS 科研費 JP17K18313 による助成を受けたものである。

注

1. 堀内（1968：p.120）
2. 白石朝子（2023）
3. 鈴木（2014）
4. 「In this Course of Study it has been the earnest desire of the author and the publishers to contribute a well-organized plan for the study of music in a broadly cultural style, looking toward giving a working knowledge of the literature of music, rather than a theoretical study of the form and grammar of the subject.」Anne Faulkner（1913：p.3）
5. 田辺（1920：p.4）
6. 鈴木（2014）
7. 森分（1997：p.129）
8. 小池（1924：p.143-144）
9. 山田（1934：p.19）

引用・参考文献

Anne Faulkner（1913）. What We Hear In Music : a laboratory course of study in music history and appreciation,Camden, N.J., Educational Department, Victor Talking Machine Company.

Henry E. Krehbiel（1919）. How to listen to music：hints and suggestions to untaught lovers of the art, New York, C. Scribner's Sons.

Joseph Horowitz（2012）. *Moral Fire: Musical Portraits from America's Fin de Siècle*. University of California Press.

伊藤直子（2017）「伊庭孝と「放送歌劇」『コミュニケーション文化』11 号, 跡見学園女子大学, pp. 111-117.

伊庭孝（1934）「音楽とは何ぞや（上）」『月刊楽譜』第 23 巻 10 号，月刊楽譜発行所，pp. 32-41.

———.（1934）「音楽とは何ぞや（下）」『月刊楽譜』第 23 巻 11 号，月刊楽譜発行所，pp. 38-44.

小池秋草（1924）『外遊印象』広文堂書店.

白石朝子（2020）「アンリ・ジル＝マルシェックスの『音楽解釈の講座』(1931) : アルフレッド・コルトーの講座内容との比較を視点として」『名古屋女子大学紀要』人文・社会編 66 号，名古屋女子大学，pp. 285-295.

鈴木聖子（2019）『「雅楽」の誕生：田辺尚雄が見た大東亜の響き』春秋社 .

————（2014）『「科学」としての日本音楽研究：田辺尚雄の雅楽研究と日本音楽史の構築』東京大学博士論文，甲第 30940 号.

鄭芝婍（2020）「ラフカディオ・ハーンの中国音楽への関心 ―クレービールとの交流を通じて」『東アジア文化交渉研究』13 号，関西大学大学院東アジア文化研究科，pp.537-546.

ヘンリイ・エドワァド・クレエビイル , 小松耕輔訳（1920）『音楽の聴きかた』目黒書店.

堀内敬三（1968）『音楽明治百年史』音楽之友社.

マークハム・リー，杉浦躬行訳（1924）『音樂の一般的智識』日本評論社.

森分治美（1997）『アメリカ音楽科教育成立史研究』広島大学博士論文，甲第 1577 号.

山田忠夫（1934）「巴里に於ける音楽講演」『月刊楽譜』第 23 巻 10 号．月刊楽譜発行所，pp.18-25.